

各関係機関の長 殿

福岡県病虫害防除所長

平成15年度病虫害発生予報第1号について

このことについて、以下のとおり送付します。

## 平成15年度病虫害発生予報第1号(4月)

## 【普通作物】

作物名	病虫害名	発生現況 ( 平年比 )	発生予想 ( 平年比 )
麦類	赤かび病	-	並

## 【普通作物 - 麦類】

## 1 麦類の赤かび病

## ( 1 ) 予報の内容

発生量：平年並

## ( 2 ) 予報の根拠

4月の気象予報では、平均気温は平年並、降水量は平年並と予想されている。

## ( 3 ) 防除上注意すべき事項

- ア 平成14年11月25日に農産物規格規定が改正され、普通小麦・大粒大麦・ビール麦・裸麦の赤かび病被害粒の混入上限率は、従来の1.0%から0.0%に変更されました。また、小麦については、赤かび病菌が作り出す毒素のデオキシニバレノール(DON)の暫定基準値が1.1ppmに設定されました。このことから赤かび病の発生を抑えるため、防除を徹底する必要があります。
- イ 穂が病原菌に感染しやすい時期は開花期であるため、防除適期は小麦で出穂後7～10日頃の開花期、大麦で出穂後1～4日頃の穂揃い期である。防除適期を過ぎると防除効果が低下するので、気象情報や生育状況に留意し、防除適期を失しないように注意する。これらの時期に降雨や曇天が続く場合には、1週間後にもう一度防除を行う。
- ウ 農業総合試験場の作況調査によると、今後の気温が平年並に経過した場合、出穂期は大麦・小麦とも平年並で、ニシノチカラでは4月4日頃、アサカゴールドでは4月11日頃、シロガネコムギでは4月10日頃、チクゴイズミでは4月13日頃と予想されている(平成15年3月24日付け福岡県米麦大豆生産改善速報第13号)。
- エ 防除薬剤は「平成15年度普通作物病虫害防除基準」を参照する。
- オ 降雨の合間に薬剤防除を行う場合、粉剤では散布後5～6時間以内に

降雨があると効果が減少するが、液剤では散布後に薬液が乾くとその後の降雨による効果の低下はない。

## 【果 樹】

作物名	病虫害名	発生現況 ( 平年比 )	発生予想 ( 平年比 )
カンキツ	そうか病 ミカンハダニ	やや少ない 並	やや少ない 並
ナシ	黒星病	-	並
ブドウ	黒とう病	-	並
カキ	フジコナカイガラムシ	-	多い

発生現況及び発生予想の平年値は、前年までの 8 ～ 9 か年の平均値とした。

## 【果 樹】

### 1 カンキツのそうか病

#### ( 1 ) 予報の内容

発生量：平年（前 9 か年平均）よりやや少なく、前年並

#### ( 2 ) 予報の根拠

ア 3 月 5 半旬の調査の結果、旧葉の発病葉率は平均 0.2 %（平年：0.7 %、前年：0.4 %）であった。

イ 4 月の気象予報では気温は平年並、降水量は平年並と予想されている。

#### ( 3 ) 防除上注意すべき事項

ア 発芽直後～展葉期の防除を徹底する。

イ 罹病葉は伝染源になるので除去する。

ウ 防除薬剤は「平成 15 年度果樹病虫害防除基準」を参照する（以下の病虫害についても同様）。

### 2 カンキツのミカンハダニ

#### ( 1 ) 予報の内容

発生量：平年（前 8 か年平均）・前年並

#### ( 2 ) 予報の根拠

ア 3 月 5 半旬の調査の結果、寄生葉率は平均 2.9 %（平年：3.9 %、前年：5.2 %）、発生ほ場率は 36.8 %（平年：31.1 %、前年：44.4 %）であった。

イ 4 月の気象予報では気温は平年並、降水量は平年並と予想されている。

#### ( 3 ) 防除上注意すべき事項

薬剤防除に当たっては、薬液が葉裏に十分かかるよう丁寧に散布する。

### 3 ブドウの黒とう病

#### ( 1 ) 予報の内容

発生量：平年並、前年よりやや少ない

#### ( 2 ) 予報の根拠

ア 昨年 6 月以降の発生が少なかったため、越冬菌量は少ないと予想される。

イ 4 月の気象予報では気温は平年並、降水量は平年並と予想されている。

#### ( 3 ) 防除上注意すべき事項

- ア 頂芽の展葉 2 ~ 3 枚の時期の薬剤防除を徹底し、初期発病を抑える。
- イ 罹病枝や前年取り残した巻きひげは極力除去する。

#### 4 カキのフジコナカイガラムシ

##### ( 1 ) 予報の内容

発生時期：平年並、前年よりやや遅い

発生量：平年・前年より多い

##### ( 2 ) 予報の根拠

ア 前年の収穫期の寄生果率は、平均 33.8% (平年：8.5%、前年：12.4%) で、越冬量は平年よりかなり多いと予想される。

イ 3月20日の調査で、若齢幼虫から成虫、さらに今年産卵された卵が確認されている。また、削りとられていない枝の分岐、付け根や切り口の部分にかなり越冬虫が見られた。

ウ 4月の気象予報では気温は平年並、降水量は平年並と予想されている。

##### ( 3 ) 防除上注意すべき事項

ア 粗皮はぎを実施しているが、枝の分岐、付け根や切り口を削り取っていないほ場では、フジコナカイガラムシの移動前に早急に削り取る。

イ 越冬幼虫が新梢に移動する4月下旬～5月上旬に薬剤防除を徹底する。

ウ 越冬虫の齢期が若齢から成虫まで大きくばらついているので、1回目の散布7～10日後に2回目の防除を実施する。

【茶】

作物名	病虫害名	発生現況 ( 平年比 )	発生予想 ( 平年比 )
茶	カンザワハダニ	やや少ない	並

【茶】

1 カンザワハダニ

( 1 ) 予報の内容

発生時期：平年・前年並

発生量：平年並で前年よりやや多い

( 2 ) 予報の根拠

ア 3月5半旬調査の結果、寄生葉率は3.2%（平年：4.5%、前年：0.2%）で、50葉当たり寄生虫数は平均2.6頭（平年：8.3頭、前年：0.1頭）であった。また、発生ほ場率は65.4%（前年：11.5%）と高かった。

イ 気象予報では、4月の平均気温は平年並で、降水量は平年並か少ないと予想されている。

( 3 ) 防除上注意すべき事項

ア 発生状況をよく観察し、発生の少ない茶園は一番茶の新芽生育期の防除はなるべく控える。

イ 発生の見られる茶園では、寄生葉率2%以上を目安に摘採予定日と使用基準に注意して防除を行う。

ウ 防除薬剤は「平成15年度茶・いぐさ病虫害防除基準」を参照し、本種の薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連用を避け、複数系統の薬剤を組み込んだローテーション散布を行う。

【野 菜】

作物名	病虫害名	発生現況 ( 平年比 )	発生予想 ( 平年比 )
冬春トマト	灰色かび病 菌核病 葉かび病	やや多い 並 やや多い	やや多い 並 やや多い
冬春ナス	すすかび病 うどんこ病 灰色かび病	並 並 やや少ない	並 並 やや少ない
冬春キュウリ	べと病 うどんこ病 褐斑病	並 並 やや多い	並 並 やや多い
イチゴ	うどんこ病 灰色かび病 ハダニ	やや少ない 並 並	やや少ない 並 並
野菜共通	ミナミキイロアザミウマ コナジラミ類	並 並	並 並

【野 菜】

1 トマトの灰色かび病

( 1 ) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多い

( 2 ) 予報の根拠

ア 3月5半旬調査の結果、発病果率は平均1.3%（平年：0.6%、前年：0.6%）であった。また一部のほ場では多発している。

イ 気象予報では、4月の平均気温は平年並、降水量は平年並と予想されている。

( 3 ) 防除上注意すべき事項

ア 하우스内の換気を図り、多湿を避ける。

イ 被害果、被害茎葉や不用な花弁は早めに除去する。

ウ 本病原菌の薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤を連続して使用せず、数系統の薬剤を組み込んだローテーション散布を行う。

エ 薬剤防除については平成15年度野菜病虫害防除基準を参照する。

農薬安全使用基準を守り、危被害防止に努める（以下の病虫害についても同様）。

2 トマトの葉かび病

( 1 ) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多い

( 2 ) 予想の根拠

ア 3月5半旬調査の結果、発病葉率は平均7.8%（平年：3.8%、前年：1%）であった。

イ 気象予報では、4月の平均気温は平年並、降水量は平年並と予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 多発生後は防除が困難であるため、発生初期のうちに防除を徹底する。
- イ 本病への薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤を連続して使用せず、数系統の薬剤を組み込んだローテーション散布を行う。

3 ナスのすすかび病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 3月5半旬調査の結果、発病葉率は平均28.5%（平年：28.8%、前年：27%）であった。

イ 気象予報では、4月の平均気温は平年並、降水量は平年並と予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 病勢が進展してからでは防除が困難であるため、発病初期のうちに防除を徹底する。

イ 本病は薬剤防除だけで病勢の進展を抑えるのは困難なので、換気を行い、多湿にならないよう管理する。ただし、急激な温度・湿度変化は避ける。

ウ 樹勢の低下で発病が助長されるので、着果量の調節や、適切な肥培管理を行う。

エ 発病葉はできるだけ除去し、ほ場外に持ち出し処分する。

オ 本病の分生胞子は、曇天・雨天時に形成され、晴天時に飛散するので曇天・雨天後の晴天日に薬剤散布すると効果が高い。

カ 本病原菌の薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤を連続して使用せず、数系統の薬剤を組み込んだローテーション散布を行う。

4 キュウリのべと病

(1) 予報の内容

発生量：平年並、前年よりやや多い

(2) 予報の根拠

ア 3月5半旬調査の結果、発病葉率は平均14.1%（平年：13.5%、前年：5.8%）であり、一部ほ場では多発している。

イ 気象予報では、4月の平均気温は平年並、降水量は平年並と予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 肥料切れになると発生が助長されるので、適正な施肥を行う。

イ 換気を行い、多湿にならないよう管理する。

ウ 本病原菌の薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤を連続して使用せず、数系統の薬剤を組み込んだローテーション散布を行う。

5 キュウリの褐斑病

(1) 予報の内容

発生量：平年より多く、前年並

(2) 予想の根拠

ア 3月5半旬調査の結果、発病葉率は平均9.3%（平年：1.2%、前年：13%）であった。

イ 気象予報では、4月の平均気温は平年並、降水量は平年並と予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 高温多湿条件で発生が増加するので、ハウスの換気を十分に行い、湿度を下げる。

イ 発病葉は発生源となるので、可能な限りハウスから持ち出し処分する。

ウ 多発生後は防除が困難であるため、発生初期のうちに防除を徹底する。

エ 本病への薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤を連続して使用せず、数系統の薬剤を組み込んだローテーション散布を行う。

6 イチゴのハダニ類

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多い

(2) 予報の根拠

ア 3月5半旬調査の結果、寄生葉率は平均3.8%（平年：5.2% 前年：2.9%）であり、一部ほ場では多発している。

イ 気象予報では、4月の平均気温は平年並、降水量は平年並と予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 多発生後は防除が困難であるため、発生初期のうちに防除を徹底する。

イ 本虫への薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤を連続して使用せず、数系統の薬剤を組み込んだローテーション散布を行う。

7 野菜類のミナミキイロアザミウマ

(1) 予報の内容

発生量：平年並、前年より少ない

(2) 予報の根拠

ア 3月5半旬調査の結果、キュウリでの寄生葉率は平均4.9%（平年：4.1%、前年：20.3%）であった。

またナスでの寄生葉率は平均1.7%（平年：3.6%、前年：0.3%）であった。

イ 気象予報では、4月の平均気温は平年並、降水量は平年並と予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 多発生後は防除が困難であるため、発生初期のうちに防除を徹底する。

イ 本虫への薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤を連続して使用せず、数系統の薬剤を組み込んだローテーション散布を行う。



## 4月の気象予報（1か月）

（予報期間 3月29日～4月28日）

2003年3月28日  
福岡管区气象台発表

### 【概要】

向こう1か月の平均気温は平年並、降水量は平年並、日照時間は平年並が多い可能性が大きいでしょう。

九州北部地方では、天気は周期的に変わりますが、平年に比べて晴れる日が多いでしょう。

### 【要素別確率】

（単位％）

要素	低い （少ない）	平年並	高い （多い）
気温	20	50	30
降水量	30	50	20
日照時間	20	40	40

- < 1週目の予報 > 3月29日～4月4日  
この期間の平均気温は、高い可能性が大きいでしょう。
- < 2週目の予報 > 4月5日～4月11日  
この期間の平均気温は、平年並の可能性が大きいでしょう。
- < 3～4週目の予報 > 4月12日～4月25日  
この期間の平均気温は、平年並の可能性が大きいでしょう。

### 参考資料

福岡における平年値

向こう1か月の平均気温、降水量、日照時間と1週目、2週目、3～4週目の平均気温

向こう1か月			平均気温（ ）		
平均気温（ ）	降水量(mm)	日照時間(h)	1週目	2週目	3-4週目
14.4	124.9	177.5	12.2	13.6	15.4

病虫害防除所では、病虫害の発生状況と防除について、ホームページでお知らせしています。アドレス及び番号は下記の通りです。

ホームページアドレス  
電子メールアドレス

www.jpnpn.ne.jp/fukuoka.  
kfok0301@sp.jpnpn.ne.jp